

保護司会連絡協議会会長賞

光が見える社会へ

堺市立 登美丘中学校 三年

高田 日茉莉

今の社会ってどんなだろう。理想の社会といえるのだろうか。何も変わらない日常の中に、毎日流れてくるのは、広範囲にわたる犯罪の数々。人々はそれをきいてあることないことを話し合う、そんな社会。

「犯罪者に一言言ってやりたい。」

こんなことを言う人もいる。私はその人に対して、この人はこういう人なんです。だから許してあげて下さいということは当然でない。だってその人のことを知っている訳でもないのだから。でも、その人のことを全く知らずにものをいうのも間違っていると思う。普段通っている学校の中でも「ひど。」「最低。」などという言葉がたまに聞こえてくるときがある。その時その言葉を発している人は何を思っているのだろうか。そんなことわかるわけがない。それが分かったら苦労しないのである。しかしその言葉を発したことによって相手の人がどう解釈しているのかもまたわからないのである。

「社会を明るくするってどういうこと？」この紙が私の手に置か

れたとき頭に言葉が過った。犯罪は普段私達の生活に近いような遠い存在である。一歩間違えてしまうと自分以外の人に危害が加わってしまうかもしれない。そんな犯罪に触れたことがない私は、どうしたらそのようなことがなくなるのか考えたことがなかった。しかし、ある日いつものようにテレビを見ているとあるひとつのニュースが流れこんできた。それは全国民の心を痛めるものだった。私の心にも衝撃が走ったし何より先にそのニュースが信じられなかった。当然一日中その話でもちきりである。私はそのあとそのニュースについてネットで調べてみることにした。大多数が加害者を批判するコメントや記事で溢れかえていた。そんな中私はあるひとつの記事を見つけた『加害者家族』についてである。『加害者家族』というのは文字の通り犯罪を犯してしまった加害者の家族のことである。最近加害者もそうだが、加害者の家族に害が及ぶこともそう少なくはない。むしろ多い方である。実際には家の壁に『人殺し』と書かれたり、個人情報晒されたりするらしい。それは果たして正しいことなのだろうか。私は加害者

の家族だったら何をしてもいいという考え方は間違っていると思う。しかも加害者とは関係のない家族までもこうしたことで被害者になってしまうかもしれない。確かに加害者本人は被害者やその家族を傷つけてしまったかもしれない。しかし、そうだとしても加害者の家族を傷つけることによって、喜ぶ人はいないだろう。また、最近選挙のニュースを見た時にも若い人が何も知らずに投票しているという記事が流れていた。私はそれを聞いて自分達がまずその出来事に対して興味をもち、理解を深めることが大切だと思った。加害者である人達が社会に戻ったときあなたは立ち直ろうとする人を助けてあげることが出来るだろうか。私は一回学校で誤りを侵したことがある。自分に不甲斐なさを感じていたとき手を差し伸べてくれたのは、友達や先生、お母さんなどだった。私にはこんなにも自分に希望の光を見出してくれる人がいるんだと勇気をもたらした。これは犯罪を犯してしまった加害者も同じではないだろうか。誰かが手を差し伸べることによってその人の勇気や支えになる。正直、今の日本ではそれは難しいだろう。だがそれを変えていくことだってできる。加害者に手を差し伸べ一人一人が笑い合えるそんな社会が私にとっての理想の社会であり、「明るい社会」である。

